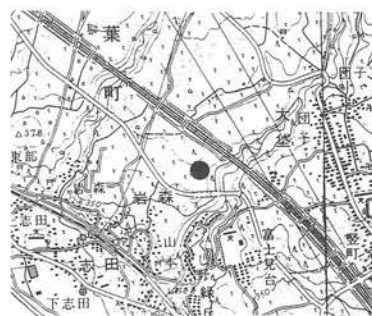


4. 光照寺跡

所在地 双葉町岩森字東堀



平成7年度に実施した双葉町内遺跡分布調査の際に通称「薬師山」の山林で土塁や石塁とみられる遺構が確認された。それまでの遺跡分布調査や城館跡の調査では確認されていなかった。東から東南にかけては坊沢川によって浸食された急峻な地形であるが、北から西にかけては薬師山といっても丘陵上にわずかに15～20m起伏した程度の山である。南は茅ヶ岳広域農道、北は中央自動車道がそれぞれ東西に通っており、標高は一番高いところで377m、一応確認できる範囲は東西約100m、南北約200mである。南側は直線的な約30mの石塁と(図中①)、虎口を思わせるような石塁が(図中②)、また東にも比較的長い石塁と入口と思われる跡が確認できる(図中③)。さらに中央部には井戸の跡と思われる石組があり(図中④)、土塁も確認できる。その他に僅かな土盛りが確認できるが、地境の土盛りと思われる。今のところ遺物は確認されていない。

光照寺については、『光照寺薬師堂縁起』に詳しく書かれているというが、その所在は不明となっている。これによると真言宗の寺院(後に改宗して曹洞宗となった)で、初めは現在地から北東の団子新居村にあったとされ、永正7年(1510)に武田信虎によって岩森村坊沢に移され、武田氏の保護を受け「百軒の坊中」といわれたほど多くの宿坊が建立されたといわれている。しかし天正10年(1582)3月、武田氏滅亡の際に織田軍によって寺全体を焼き討ちされたが、薬師堂は焼失を免れた。その後江戸時代初めに岩森村山本に寺は再興され、その時に薬師堂も移築されたという。かつての薬師堂をはじめ寺の主要部があったところを「薬師山」と、宿坊が点在していたところを「坊沢」というようになったという(坊沢一帯は現在でも光照寺名義の土地が点在している)。また薬師堂に安置されている薬師如来像の台座に書かれている記述によると、寛文5年(1665)に住職の天開春暁は薬師堂を拝殿に改修し、同時に厨子も修復したとある。

焼き討ちから200年以上経た文化10年(1813)に編纂された『甲斐国志』には「曹洞宗宇津谷村金剛寺ノ末除地二畝廿歩境内ニ薬師堂アリ拝殿二間三間飛驒工匠本州ニテ椽造リノ最初ト云ヒ伝フ本尊春日ノ作」という記述のみで、かつての寺の繁栄ぶりを示す記述や薬師山・坊沢川の由来についての記述はなく、編纂の段階で漏れてしまったのか、既に当時の多くの人々の記憶から忘れ去られてしまっていたことが考えられる。

薬師山の発掘調査は行われておらず、坊沢一帯も宅地化され、文献もないに等しいほどの現状では詳細について知ることは困難であり、「光照寺跡」と断定することはできない。しかし、上記のことから周知の遺跡の一つとして遺跡名を「光照寺跡」としている。

